

(1)

$x^2 + y^2 = 1$  に、 $y = t(x+1)$  を代入すると

$$x^2 + t^2(x+1)^2 = 1 \quad (t^2 + 1)x^2 + 2t^2x + t^2 - 1 = 0 \quad (x+1)\{(t^2 + 1)x + t^2 - 1\} = 0$$

$$Q(t) \text{ の } x \text{ 座標は } \frac{1-t^2}{1+t^2}. \quad Q(t) \text{ の } y \text{ 座標は } t\left(\frac{1-t^2}{1+t^2} + 1\right) = \frac{2t}{1+t^2} \quad \therefore Q(t) \left( \frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right) \dots\dots (\text{答})$$

また、

$$\begin{aligned} \{Q(s)Q(t)\}^2 &= \left( \frac{1-s^2}{1+s^2} - \frac{1-t^2}{1+t^2} \right)^2 + \left( \frac{2s}{1+s^2} - \frac{2t}{1+t^2} \right)^2 \\ &= \frac{\{(1-s^2)(1+t^2) - (1-t^2)(1+s^2)\}^2 + 4\{s(1+t^2) - t(1+s^2)\}^2}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} \\ &= \frac{(1-s^2+t^2-s^2t^2-1+t^2-s^2+s^2t^2)^2 + 4(s-t-s^2t+st^2)^2}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} \\ &= \frac{4(t^2-s^2)^2 + 4(s-t)^2(1-st)^2}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} = \frac{4(t-s)^2(t+s)^2 + 4(s-t)^2(1-st)^2}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} \\ &= \frac{4(t-s)^2\{(t+s)^2 + (1-st)^2\}}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} = \frac{4(t-s)^2(t^2 + 2st + s^2 + 1 - 2st + s^2t^2)}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} \\ &= \frac{4(t-s)^2(1+t^2+s^2+s^2t^2)}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} = \frac{4(t-s)^2(1+t^2)(1+s^2)}{(1+t^2)^2(1+s^2)^2} = \frac{4(t-s)^2}{(1+t^2)(1+s^2)} \end{aligned}$$

$$0 < s < t \text{ より } \therefore Q(s)Q(t) = \frac{2(t-s)}{\sqrt{(1+t^2)(1+s^2)}} \dots\dots (\text{答})$$

(2)

$s = \tan\alpha, t = \tan\beta$  と表せる。  $0 < s < t$  とすると、  $0 < \alpha < \beta < \frac{\pi}{2}$

$$\text{倍角定理より } \tan\alpha = \frac{2 \tan \frac{\alpha}{2}}{1 - \tan^2 \frac{\alpha}{2}} \quad \therefore s = \frac{2u}{1-u^2} \quad \therefore 1+s^2 = \frac{(1-u^2)^2 + 4u^2}{(1-u^2)^2} = \frac{1+2u^2+u^4}{(1-u^2)^2} = \left( \frac{1+u^2}{1-u^2} \right)^2$$

同様に  $t = \frac{2v}{1-v^2}$ 、  $1+t^2 = \left( \frac{1+v^2}{1-v^2} \right)^2$  が導かれる。

$0 < \alpha < \beta < \frac{\pi}{2}$  より  $0 < \frac{\alpha}{2} < \frac{\beta}{2} < \frac{\pi}{4}$  で、  $\tan \frac{\alpha}{2} < \tan \frac{\beta}{2} < 1$ 、  $u < v < 1$  であるから、(1)の結果に代入して

$$\therefore Q(s)Q(t) = 2 \left( \frac{2v}{1-v^2} - \frac{2u}{1-u^2} \right) \cdot \frac{1-v^2}{1+v^2} \cdot \frac{1-u^2}{1+u^2} = \frac{4\{v(1-u^2) - u(1-v^2)\}}{(1+v^2)(1+u^2)} = \frac{4(v-u)(1+uv)}{(1+v^2)(1+u^2)}$$

したがって、 $u, v$  がともに有理数ならば、 $Q(s)Q(t)$  も有理数である。(証明終)

(3)

$0 < u_k < 1$  ( $1 \leq k \leq n$ ) を満たす任意の異なる有理数  $u_1, u_2, \dots, u_n$  を考える。

このとき、傾き  $s_k$  ( $1 \leq k \leq n$ ) を  $s_k = \frac{2u_k}{1-u_k^2}$  で定義する。

さらに、 $x^2 + y^2 = 1$  上の点  $Q(s_k)$  ( $1 \leq k \leq n$ ) を  $Q(s_k) \left( \frac{1-s_k^2}{1+s_k^2}, \frac{2s_k}{1+s_k^2} \right)$  で定義する。

(1)、(2)の議論より、このようにして定めた  $n$  個の点  $Q(s_1), Q(s_2), \dots, Q(s_n)$  は、いずれも  $x$  座標、 $y$  座標ともに有理数であり、どの異なる 2 点  $Q(s_i), Q(s_j)$  に対しても線分  $Q(s_i)Q(s_j)$  の長さは有理数であり、さらに、 $Q(s_1), Q(s_2), \dots, Q(s_n)$  は同一円上の点であるから、どの異なる 3 点も一直線上にない。

ここで、有理数とは既約分数で表せる数であり、分母の倍数をかければ整数になる。

今、 $n$  個の点  $Q(s_1), Q(s_2), \dots, Q(s_n)$  の  $x$  座標および  $y$  座標、 $Q(s_1), Q(s_2), \dots, Q(s_n)$  のうちいずれか 2 点を結んで

できる  ${}_n C_2 = \frac{n(n-1)}{2}$  本の線分  $Q(s_i)Q(s_j)$  の長さの、分母に現れるすべての整数の最小公倍数を  $L$  とする。

$Q(s_1), Q(s_2), \dots, Q(s_n)$  の  $x$  座標、 $y$  座標に  $L$  をかけて得られる点を  $A_1, A_2, \dots, A_n$  とすると、

$A_1, A_2, \dots, A_n$  はいずれも  $x$  座標、 $y$  座標ともに整数、すなわち格子点であり、

$A_1, A_2, \dots, A_n$  のどの異なる 3 点も一直線上になく、

$A_1, A_2, \dots, A_n$  のどの異なる 2 点  $A_i, A_j$  に対しても、線分  $A_iA_j$  の長さは整数である。

以上により、題意を満たす  $n$  個の点  $A_1, A_2, \dots, A_n$  が存在することが示された。(証明終)